
魔法少女リリカルなのは～いにしえの王～

もじゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはぐいにしえの王

【Nコード】

N2248Q

【作者名】

もじゃ

【あらすじ】

これは、少年少女達が出会い、それぞれの思いの為に戦い、そしてみんなで未来に向かって少しずつ進んでいく物語。魔法少女リリカルなのはぐいにしえの王。始まります。

処女作なのでおかしな所があるかもしれません。

プロローグ（前書き）

見ていたら、書いてみたくなったので、やってみました。

駄文ですが、よろしくおねがいします。

プロローグ

戦場の跡地

そこは多くの兵士、騎士が死に大地は焼けて所々煙が上がっていた。その戦場には少年・・・小さき王と数名の王達がそこに居た。

『どうして・・・どうして義兄さまだけがこんな目に・・・』一人の王は泣きながら言う。

『これしか方法が無かったんだ』少年が小さな声で言う。

見た目は少年だが既に30代の成人男性であり、一国の王でもある。武術と魔術に長けており、『神に近きし魔道の王』と人々から称賛され『魔神』と呼ばれていた。若き王達からは兄として慕われてもいた。

しかし、その王の命の灯火は消えかけていた。体には剣や槍、矢などが刺さっており、傷口からは今も血が湧き水のように溢れ出していた。

『《あれ》を倒す唯一の方法は、力のある者の体に取り込み、その者ごと滅すること』他の王が言う。

《あれ》とは人間の負の感情から生み出された思念体の事である。多くの人間から集まった負の感情が暴走し、多くの人を操りこの戦争を引き起こしたのである。

『俺の命一つでこの世界が救われるのなら安いものだ』 王達は泣きながらもしっかりと義兄の言葉を聞く。

『俺は幸せだったよ・・・こんなにも・・・義弟や義妹が出来て・・・笑いながら言った。しかし、時は来てしまった・・・』

『はあっ・・・はあっ・・・そろそろ・・・別れの時・・・だな・・・』 息も荒くなり、声もかすれていく。出血も少しずつだが減りはじめている。

『『『義兄さん(さま)』』』 王達が泣きながら叫ぶ。

最後の力を振り絞り、泣く者達の頭をなでる。いつもの様にやさしく・・・

『さ・・・らば・・・だ・・・我が・・・愛する者・・・達よ・・・』

そして、小さき王は息を引き取った・・・

戦争は多くの兵と、《魔神》と呼ばれし一人の王の犠牲により終焉を迎える・・・

オリジナル主人公設定（前書き）

主人公の紹介です。

オリジナル主人公設定

オリジナル主人公

名前：赤羽^{あかは}ちづる

9歳 女 イメージCV：雪野五月（ひぐらしの園崎魅音や犬夜叉のかごめ役の人）

緑髪で腰まである髪を首の辺りで纏めて縛っている。瞳の色は赤色。一人称は私。

身長、体重は、なのは達と同じくらい。なのは達とは親友で同じクラス。

運動神経がよく、体育の成績は常にトップ。なのはと共に事件に巻き込まれ、魔道士として覚醒する。

術式：古代ベルカ式 魔力光：金色 魔力変換資質：電気 魔力
ランク：A A A 魔導士ランク：A A

魔法の扱いが苦手だが、身体能力強化、飛行魔法と牽制程度の魔法弾を使用できる。

デバイス：槍型インテリジェンスデバイス 「マルテ」 蒼色の槍で先端には魔力刃が形成される。

攻撃手段は突き刺すか、薙ぎ払うのみ。

バリアジャケット：F a t eのランサーの軽鎧をイメージ。

使用可能魔法・技

- ・神雷槍：槍に強力な電気を纏わせ、魔力刃が相手を貫く技
- ・サンダーショット：槍の魔力刃を飛ばす魔法

オリジナル主人公設定（後書き）

次回はいよいよ本編に入ります。見ていただけたら嬉しいです。

1話 動きはじめる物語（前書き）

大変お待たせしました。 1話を投稿します。

1話 動きはじめる物語

鳴海のとある朝、とある家で少女、赤羽ちづるは目覚める・・・

「また、あの変な夢見ちゃった・・・」

夢を見た為か、ちづるは小さく呟いた。

でも、リアルな夢だったな。知らない人ばかりだったけど、でも何処かで見たことあるような気がするんだよね

ちづるは見た夢を思い出しながら考える。しかし、すぐに夢についてのを考えることを止めた。

「夢だしあんまり気にしない方がいいかな」

そう言つと、ベッドから出て着替えを済ませて部屋を出た・・・

リビングに行くと、お母さんが朝食を用意していた。

「お母さんおはよう」

「おはようちづる」

私のお母さん 赤羽由希。あかはゆき

赤羽家は私とお母さんとの2人家族だ。

本当はお父さんとお兄ちゃんがいるみたいだけど、私が小さい頃に離婚して私がお母さんに、お兄ちゃんがお父さんに引き取られたらしい。どこに住んでいるのかはわからないんだけど。

お母さんは仕事が忙しくて一緒にいれる時間が短いのは少し淋しいけど、休みの日は一緒に遊んでくれる。大好きなお母さん。

「じゃあ朝ご飯にしようか」

お母さんがそうだったので、私も椅子に座った。

『いただきます』

いつものようにお母さんと一緒に朝食を食べる。

こうしていつもの朝が始まる・・・

朝食を済ませた後、2人はそれぞれ準備を済ませる。

「お母さんいつも通りの時間には帰ってこれるから」

玄関の鍵を閉めながらお母さんが言った。

「うん、わかった。じゃあ行ってきます」

「行つてらっしゃい」

家を出て少ししたら、目の前に私と同じ聖祥大付属小学校の制服を着ていて、茶色の髪で両サイドでおさげにしている女の子が歩いていた。

「なのはちゃんおはよう」

「あ、ちづるちゃんおはよう」

私の友達の高町なのはちゃんだ。
なのはちゃんと話をしながら歩き、その後バスでアリサちゃんとすずかちゃんとも一緒になり、いつものように学校へ行った・・・

〽昼、学校屋上〽

「うちは、お父さんとお母さんが会社経営だし、いっぱい勉強してちゃんと後を継がなきゃ・・・」

私の友達、アリサ・バニングスちゃん。髪は金色で私と同じくらい長い。お金持ちのお嬢様で大きなお屋敷に住んでいて、
犬もたくさん飼っている。頭も良くて私達のリーダー的な女の子。

「私は機械系が好きだから・・・工学系で専門職がいいかなと思ってるけど・・・」

もう一人の友達、月村すずかちゃん。髪は紫色で同じく長い。すずかちゃんもアリサちゃんと同じだけど、

すずかちゃんは猫を飼っている。おとなしくてやさしいけど、運動は私と同じくらいできる。

二人とは1年生のときになのはちゃんと一緒に友達になった。

今はお昼を食べながら将来のことについて少し話し合っている・・・

「ふたりともちゃんと決まってるんだ・・・」

なのはちゃんが少し落ち込みながら話していた・・・

「なのはは翠屋の二代目じゃないの？」

アリサちゃんが聞いていた。

なのはちゃんは、他にもやりたい事があるかもしれないけど、それもよくわからないらしい

そして・・・

「特技も取り得も特に無いし・・・」

そう言った次の瞬間アリサちゃんがなのはちゃんのほっぺを引っ張りながら何か言ってた・・・

多分勉強の事かな？何かは忘れたけどアリサちゃんより成績がよかったし。

すずかちゃんがおろおろしながら2人を止めようとしていた。

「そっいえば、ちづるはどうなの？」

アリサちゃんが私に話しかけてきた

「私？私はまだ決まってるじゃない。色々やってみたい事は沢山あるんだよね」

あまりお母さんに迷惑はかけたくないしな、どうしよう・・・

「何をやりたいかは、ゆっくりと決めるよ」

一応返事だけはしておこう

「そう？ならいいんだけど」

私も将来の事ちゃんと考えなきゃな

～下校中～

ちづるはなのは達と今日の話を話しながら公園を歩いていた、その時・・・

《助けて・・・》

誰かの呼び声が聞こえた・・・

「ん？アリサちゃん何か言った？」

アリサちゃんが無か話しかけてきたのかと思つて聞いてみた・・・

「え？何も言つてないわよ。」

？？？気のせいだったのかな？と思つていたら・・・

「ねえちづるちゃん。」

なのはちゃんが話しかけてきた・・・

Side:なのは

《助けて・・・》

あれ？今何か聞こえた？そう思つていたら・・・

「ん？アリサちゃん何か言つた？」

「え？何も言つてないわよ。」

ちづるちゃんが今のをアリサちゃんに聞いていた。今の聞こえてのかな？

今のこと聞いてみよう聞いてみよう・・・

「ねえちづるちゃん」

「何？なのはちゃん」

ちづるちゃんがこっちを向いたのでさっきの事を聞いてみた。

「今、何か聞こえなかった？」

「なのはちゃんも聞こえたの？」

どうやらちづるちゃんも聞いていたみたい、そして・・・

《助けて！》

やっぱり誰かが呼んでる！

「また聞こえた、あつちかな？」

声の聞こえたほうに、ちづるちゃんと一緒に走り出した。

そこには・・・小さな動物が倒れていた・・・

「どうしたの？いきなり走り出したりして・・・」

アリスちゃんとすずかちゃんが来た。

「動物？怪我してるみたい・・・」

そ、そっだ！怪我してる。早く何とかしなきゃ！

「ど、どうしよう！？」

「とりあえず病院に連れて行こう・・・」

は、早くこの子を病院に連れて行ってあげなきゃ！

S i d e : 了

〈動物病院〉

あの後、獣医さんに見てもらったら怪我はひどくないらしく休ませていたらすぐに治るみたい、よかった。

あの子・・・フェレット？は首に赤い宝石と青い十字架のアクセサリーを付けていた。誰かのペットなのかな？

今日は病院で預かる事になった。

「よかったねあまりひどい怪我じゃなくて」

みんなも怪我がひどくなくて安心したようだ。

明日、みんなとあの子を見に来ることを約束した・・・

「じゃああたし達は塾があるからこれでね」

アリサちゃんがそう言ったので、私もさよならの挨拶をした。ここからは家とは正反対になっちゃうからね。

「なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、また明日ね」

『またね』

なのはちゃん達と別れて家に向かった・・・

く夜、赤羽宅

ちづるがいつものように寝る準備をしようとした時にそれは起きた・・・

《聞こえますか？僕の声が・・・》

今日、公園で聞いた声がまた聞こえたのだ・・・

「またあの声だ」

この声ってやっぱりあの子（フェレット？）のなのかな

どうやら声のことが気になるのか、寝る準備を止めて、外に出る準備をし始めた・・・

ちよっと気になるから病院に行ってみようかな

そして、ちづるは母に気づかれないように家を抜けだした・・・

1話 動きはじめる物語（後書き）

2話はあまり時間をかけないようにしようと思います。

2話 魔法との出会い（前書き）

お待たせしました。

2話目です。

2話 魔法との出会い

家から抜け出して動物病院に向かっている時に病院の方から大きな音が聞こえた。

急いで向かってみると、なのはちゃんが黒いお化けみたいなモノに襲われていた

「なのはちゃん」

「ちづるちゃん」

「大丈夫！？あとあれなに！？」

「えと、とつとりあえずこのこに聞いて」

あのフェレットを渡された。この子に聞く？と考えていたら…

「君も資質を持っている…。お願いします僕に力を貸してください。とりあえずこれを！」

「ふえ、喋った！？」

いきなり喋ったから驚いたけどフェレット君？から青い十字架の付いたネックレスを受け取った

綺麗なネックレスだなあと思っていたら

《はじめまして》

いきなり話し掛けてきた！

「うわ！喋った!？」

《私はマルテと申します。マスターの名前を教えてください？》
マスター？マスターって何だろう？

「えっと、私の名前は赤羽ちづるだよ」

《赤羽ちづるですね。登録を完了しました。これからよろしくお願い致します》

「うん！よろしくね！」

そのあとなのはちゃんが呪文を唱えて変身してた………なんかとても恥ずかしそう

「ねえ、マルテ。私もあんな感じに呪文唱えなきゃいけないの？」

《私に命令していただければ、唱えなくても大丈夫ですよ。》

へ？そうなの？………じゃあ何でなのはちゃん唱えてたんだろう？

うん、とりあえず私も変身しよう

「じゃあマルテ、お願い！」

《了解しました。セットアップ》

気がつくと、服が青いボディースーツみたいなものになっていて、手にはちよつと長い槍みたいなものが握られていた

《マスターの記憶の中にあるものを参照してみました》

「うわあ、何かゲームに出てくる戦士みたいでカッコイイね！それに動きやすい！」

《喜んでいただけて良かったです》

それに何だろう？この感じ…とても懐かしい気がする…

ちづるは動きを確認しながら、自分の中にある不思議な感覚が何なのかを考えた

「とりあえず、あれを何とかしなきゃ！」

なのはちゃんの方を見ている
なのはちゃんが封印をする方法をフェレット君から教わっている。

封印するって事は集中しなきゃいけないんだよね多分

だったら私はそれをサポートするためにアイツの注意を引き付けよう

「マルテ、行くよ!」

《了解しました》

私が突撃してくる事に怪物が気づいた

『ギシャアアア!』

奇声を上げながら手のような触手を伸ばしてきた

「うわっ!?!、危なっ、いつ、と!」

それを体を屈めたり飛んだりして、かわしながら槍で切り捨てていく

やっぱり不思議だ…今までケンカなんて一度もしたこと無いし、剣道とかみたいな武術も習ったこと無いのに、でも……戦い方を……
槍の扱い方を知っている……

『グウウウウ……』

気がつくとも黒い怪物は、最初の頃と比べると弱々しくなり、見た目も少し小さくなった気がする

これだけやれば十分かな？

「なのはちゃん！あとお願い！」

あとの事はなのはちゃんに任せよう。

S i d e : なのは

ちづるちゃんが注意を引き付けてくれたおかげで、封印方法も覚えることが出来た。

最後の封印を任されたから私も頑張らなくっちゃ！！

杖をあの怪物に向けて…

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル21、封印！！」

『ギヤアアアア』

怪物がいなくなって青い宝石が残ってた

「これがジュエルシードです、レイジングハートで触れて」

レイジングハートを近づけたら吸収されちゃった

「封印できたのかな？」

うう、変身の時もそうだったけどこの呪文も唱えるのとても恥ずかしいよう

……あれ？そういえばちづるちゃんも変身してたけど、呪文唱えて無かったな。どういうことなんだろう？

S i d e : 了

さっきまでいた怪物が青い菱形の宝石になって、なのはちゃんのデバイスのレイジングハートに吸い込まれていった

そのあとあのフェレット君が気を失っちゃってなのはちゃんが慌てたけどようやく一息つけるよ、疲れた〜

「何かすごいことになったね〜」

「う、うん。そうだね」

なのはちゃんとはしばらく話をしていたら……

ウ〜〜〜ウ〜〜〜

パトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

「ね、ねえちづるちゃん……」

「どしたの？」

「もしかしてなんだけど、私達がここにいるのって、とてもアレなんじゃないかな……」

よく周りを見てみると色んなものが壊れてた……あれ？これって私達がヤツチャッタんだよね？うん。なのはちゃんの言う通りとてもアレだね

「…………と、とりあえずここから離れよう！」

ここにいたら警察の人に見つかって無断で外に出てたことがお母さんにバレちゃうよ

「あ、ちづるちゃん。待って〜」

なのはとちづるはその場から逃げるように走り出した…

S i d e : ? ? ? ?

なのはとちづるがジュエルシードを封印してその場からいなくなった後、上空に一つの影が存在していた…

「魔力反応を感じて来てみたら面白いものが見れたなあ」

月明かりに照らされ姿を見せた銀髪の少年は少女達が走って行った方を見ながら笑っていた…

「さてと、そろそろ帰らないと姉さんが心配するかもしれないし帰るとするか」

そう呟いた時、足元に魔法陣が現れて、次の瞬間にはそこに少年はいなかった…

S
i
d
e
:
J

2話 魔法との出会い（後書き）

感想などがあると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2248q/>

魔法少女リリカルなのは～いにしえの王～

2011年5月31日21時12分発行